

称号の認知が仮名型 CMC のコメントの攻撃性に与える影響

Effects of titles on cyber aggression in pseudonym type computer mediated communication

学籍番号：201421609

氏名：山口 浩基

Hiroki YAMAGUCHI

本研究は、情報端末を用いたコミュニケーション (Computer-Mediated Communication, 以下 CMC) の匿名性を保ちながら、自己意識の過度な変化によるユーザの攻撃的発言を未然に防止する手法を提案し、その効果を検証する。

近年、個人用情報通信端末の普及に伴い、CMC を行うユーザが数多く存在している。CMC はその匿名性により、ユーザの自己意識を変化させ、社会における支配的な価値・規範から逸脱させた事例が増加しており、ユーザ間の諍いに発展する場合がある。その防止策として、コメントの投稿ボタン押下時に再考を促すものや、中傷的な単語・文章を検出し、投稿を制限するものが存在するが、いずれも対処療法的であり、ユーザの自己意識への影響は乏しいと考えられる。そこで本研究では、CMC ユーザのコメントの攻撃性を数値化し、その平均値に基づいて、ユーザの攻撃性を表す称号をユーザに表示する仕組みを提案した。

攻撃性の抑制効果を検証するため、被験者 72 名 (平均年齢 21 歳, 18~27 歳) を対象に実験を行った。実験では、電子掲示板で 20 個の議題 (5 議題×4 セット) に対し、予め攻撃性 (最高 5~最低 1) が設定された 8 個の候補コメント群から、被験者の考えに最も近いものを選択させた。被験者は 24 名ずつ、称号を表示しない統制群、称号を被験者が選んだコメントの攻撃性に合わせて付与 (通常方式) する実験群 1、被験者に通常方式で与えられる称号以外の称号からランダムで付与する実験群 2 に分けた。選択されたコメントの攻撃性の平均は実験群 2 (2.39)、実験群 1 (2.42)、統制群 (2.60) となった。U 検定の結果、統制群と実験群 1 および実験群 2 との間で有意差 ($p < .01$) が見られ、称号によるユーザの攻撃性抑制の効果が示唆された。さらに、あるセット n と次セット $n+1$ との間の攻撃性変化量は、セット $n+1$ で与えた称号別に“過激” (-0.15)、“普通” (-0.02)、“温和” (+0.06) となった。U 検定の結果、“過激”と“温和”との間で有意差 ($p < .05$) が見られたことから、“過激”の称号は他の称号と比較して、より被験者の攻撃性を抑制する可能性が示唆された。一方で、実験では攻撃性が 4 を上回る候補コメントが選択されることは稀であり、被験者が実験環境で CMC を行ったために、攻撃性を抑制した可能性がある。

以上の結果から、称号は電子掲示板形態の CMC において、被験者の攻撃性を抑制し得ると結論づけた。今後の課題は、さらに被験者の攻撃性を誘発するための、被験者年齢層の再設定、議題・事前準備コメントの選定および実験用掲示板インタフェースの改善と、既存手法との比較、そして電子掲示板以外の CMC 環境での、称号の効果の検証である。

研究指導教員：真栄城 哲也

副研究指導教員：上保 秀夫